

『分別と多感』

——十八世紀ふうの人間観

海老池 俊治

(1) 『分別と多感』

『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) はジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775—1817) の六篇の完成作中、最初に出版されたのであるが、執筆の年代はそれよりもかなり古く、他の作品と重なり合っていたらしい。この小説の原形についてのいい伝えは確認するに足る資料がないから、いま問題外におくとすれば、『分別と多感』は、出版の順序とは逆に、『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) の——少くとも、その原形の、直後に書かれたようである。⁽¹⁾

それら二つの小説はいずれも草稿の完成と出版のあい

だに、十年以上の隔りがあり、もちろん、同じころに幾度も改訂の筆が加えられたに相違ない。したがって、オースティンの全作品のなかで、体裁内容ともに、特別似通った一対をなしている。だいいち、題名の選びかたがまったく同じ態度である。「*Pride and Prejudice*」という頭韻を重ねた句が十八世紀末のある小説中の文章から取られたらしいことは、すでに指摘されており、ほとんど疑いの余地がないが、同じく頭韻を重ねた「*Sense and Sensibility*」という句が題名に選ばれたことは、ことに、この作品の原形が別の名で呼ばれていたとしたら、なおさら、偶然ではないであろう。標準的なオースティン伝の著者チャップマンは、この題名は『自負と偏見』にな

らってつけたものであろう、といっている⁽²⁾。

オースティンが直接“Pride and Prejudice”という句を取ったらしい作品はもとより、十八世紀後半の小説一般に、“pride”なり“prejudice”なり、あるいは、その併列なりの観念が、実際たびたび見出され、それとオースティン自身のその使用例とを比較することによって、『自負と偏見』の文学史的位^レ置づけを試みる事ができる。その方法を展開すれば、『自負と偏見』をはじめオースティンの小説の積極的な特質を分析し、確認することさえできると思われる。ところで、“Sense and Sensibility”は、“Pride and Prejudice”にならった命名であるにせよ、ないにせよ、後者のような直接の原拠がたどられていないが、“sense”と“sensitivity”は“pride”や“prejudice”以上に、オースティン文学の母胎をなした十八世紀的精神の通有観念である。それらの語(観念)の詮索は、オースティンの小説を正しく理解するため、無駄ではないであろう。

ただ、それらの二語が平凡であり、『分別と多感』が『自負と偏見』に比べて、いわば一種の失敗作であるために、その吟味は平板な解説に陥るおそれがある。しか

し、また、『自負と偏見』の輝かしい人間性の真実の発見に、側面からの光を投げる創作のメカニズムを、逆説的に明かにすることができるとは、いえない。

『分別と多感』の筋をくわしく述べるまでもあるまい。父を亡くしたエリナー(Elinor)とメアリーアン(Mary Anne)というダッシュウッド(Dashwood)家の姉妹がそれぞれにふさわしい配偶をえる、ということである。エリナーの相手は終始穩健なエドワード(Edward Ferrars)であり、メアリーアンは輕薄な才子ウィロビー(John Willoughby)に熱を上げて、棄てられ、堅実な中年の紳士ブランドン大佐(Colonel Brandon)の愛情を受け入れるのである。

姉妹のうち、姉のエリナーが「分別」を、妹のメアリーアンが「多感」を表わしていること、そして、全篇の趣旨が「分別」の謳歌であることは明かである。「謳歌」というのはいささかいいすぎかもしれない。しかし、姉妹が分け持つこの人間性の対立観念は、「自負」と「偏見」のように、主要人物である男女の対立と結合という型をとっていないために、いいかえれば、物語の主題に直接

(3) 『分別と多感』

具象化されていないために、完全には一体とならないのである。完全には——兄弟愛ないし姉妹愛はオースティンの大きな関心の一つである。この場合にも、「分別」と「多感」は決して平行線の原理ではない。それは後述する通りである。しかし、「分別」が「多感」と結合するための劇的な葛藤が十分みごとに映像化されているとはいえない。

で、まず、対立するにせよ、しないにせよ、二つの風性「分別」と「多感」が、エリナーとメアリアンにどう当てはめられているか。

題名が暗示しているように、「sense」という語は作中に何度も繰り返し使われているが、エリナーについてはじめてそれが語られるのは、意外に、物語がかなり進んでからである。二、一に、⁽⁴⁾こんなことが書いてある——

She was stronger alone, and her own good sense so well supported her, that her firmness was as unshaken, her appearance of cheerfulness as unvariable, as with regrets so poignant and so fresh, it was possible for them to be.

この“good sense”はもちろん「分別」であり、それは彼女の立居振舞いの健全な原理であった、という主張である。

次に、“good”のつかない“sense”の用例が、二、十にある。世俗的なエリナーの兄が彼女に裕福なブランドン大佐を擱えろと忠告し、エドワードとの愛情は問題にならぬ、と説くところである——

It is not to be supposed that any prior attachment on your side—in short, you know as to an attachment of that kind, it is quite out of the question, the objections are insurmountable—you have too much sense not to see all that.

この場合、エリナーの兄のいう“sense”とは世俗的な利害の弁別力——それも、自分の利害に引きつけたものであり、作者の趣旨はアイロニカルであるが、それが「分別」であることは間違いない。

興味深いことは、はっきりエリナーだけに言及した“sense”の用例が、全篇で右の二つしかないことである。その事実はいろいろな含みをもつて解釈することができらるであろうが、ひとつには、“sense”という観念がきわ

めてありふれた属性を表わし、一個の人間を特徴づける標語として力が弱かった、少くとも、人間を映像的に印象づけにくかったためであろう。「sense」という觀念が哲學的にどう理解されたにもせよ、いわゆる「理性の時代」であった十八世紀のイギリス精神は、根本的に、「分別」を重んじたのであり、オースティンはそれを受動的に容認したからであろう。

それに比べれば、メアリアンの「sensibility」は、いさう鮮明に文脈から浮かび上る。開巻第一章に、
 Elinor saw, with concern, the excess of her sisters' sensibility...

とあるのをはじめ、全篇に四度その言及がある。この語が「sense」に比べては、ほぼ四分一の頻度数でしか使われていないことを考えれば、その対照はかなりきわ立っている。メアリアンの「sensibility」は作者オースティンの創作意識のなかに、明瞭に顕在していたと思われる。

二

メアリアンは「多感」を表わしているが、「分別」を持ち合わせていないわけではない。一、一にある次の文章

は、はっきり彼女の「分別」を語っている。ダッシュウッド家の末娘マーガレットについて述べた個所である——
 Margaret... had already imbibed a good deal of Marianne's romance, without having much of her sense...

姉妹、エリナーとメアリアンの対立が十分劇的な物語の主題になっていないことを、先に一言したが、彼らが表わす「sense」と「sensibility」は必ずしも矛盾的な觀念ではないようである。ことに、前者は作中で種々な意味の中を持っている。

たとえば、独立した「sense」なしに「good sense」のほかに、たびたび「sense of」という語法が出てくるが、メアリアンについて述べた例も少くない。まず、一、十六で、エリナーが母にメアリアンとウィロビーが婚約しているのかどうかをきいてみたら、とすすめたとき、母が答える——

I would not attempt to force the confidence of any one; of a child much less; because a sense of duty would prevent the denial which her wishes might direct.

次に、二、七で、メアリアンがウィロビーの絶交状を

(5) 『分別と多感』

受け取ったとき、エリナーがなんとかして彼女を慰めようとするよ¹⁾

A glass of wine, which Elinor procured for her directly, made her more comfortable, and she was at least as able to express some sense of her kindness, by saying

「なほ、もう一つ、物語の終りに近い三、十一で、エリナーがメアリアンに、ウィロビーと結婚したとしても、うまうまかかったら、と説く個所である——」

Your sense of honour and honesty would have led you, when aware of your situation, to attempt all the economy that would appear to you possible...

メアリアンは悲痛の只中で姉の親切を「感知」できる少女であり、母と姉から「義務」と「名誉」の「感得」を期待されている。そして、健全な「分別」をそなえてゐる。彼女の「感受性」はそのような、生活的、道徳的、知的な知覚力から切り離すことができない、という含意が汲みとれる。

ジェイン・オースティンが『分別と多感』を書いたころ、すなわち、十八世紀の末から十九世紀の始めにかけて、「sense」という語が持っていた意味の中は、N. E.

1) (オックスフォード英語辞典)を見れば、簡単に、しかも、実証的に分るわけであるが、そこに分類されているような細かい語義の差を彼女がどう意識していたかは、いま問題にするまい。ただ、この語の現実的な実体・機能でなく、その規範的な意義を考へる場合に、彼女が思い浮べたものは、ジョンソン博士 (Samuel Johnson, 1709—84) の『字引』(The Dictionary of the English Language, 1755)ではなかったかと思われる。オースティンがこの「良識」の代表者に傾倒していたことは、一八一八年版の『ノーサンガー・アベイ』(Northanger Abbey)と『説得』(Persuasion)の合本の序に記されている通りであり、また、その『ノーサンガー・アベイ』の「十四」には、単語の語義に潔癖な冗談話に、ジョンソンの『字引』が引き合いに出されている。

とにかく、ジョンソンの『字引』には、「sense」の語義が次のように十項目に分類されている——

1. Faculty of power by which external objects are perceived; the sight; touch; hearing; smell; taste.
2. Perception by the senses; sensation.
3. Perception of intellect; apprehension of mind.

- 4. Sensibility; quickness of perception.
- 5. Understanding; soundness of faculty; strength of natural reason.
- 6. Reason; reasonable meaning.
- 7. Opinion; notion; judgment.
- 8. Consciousness; conviction.
- 9. Moral perception.
- 10. Meaning; import.

ことに、四の定義はなほ暗示的であるが、オーステインは「分別」についても、他の多くの場合と同じく、基本的に、ジョンソンの權威に反逆して、いよいよように見せる。

メアリアンがヘリナーと、¹⁾ “sense” を持つてゐる。

They had too much sense to be desirable companions to the former... (II, XIV.)

ふや、ウイロービーがマッシュウマン一家に “sense” を見出す——

...and every thing that passed during the visit, tended to assure him of the sense, elegance, mutual affection, domestic comfort of the family to whom accident had now introduced him. (I, X.)

ことを保証する作者の筆致を見ると、そう思わないわけにいかない。

なお、一言つけ加えれば、“sense” の形容詞 “sensitive” が四様の意味を持つことは、C. S. ルイスの指摘している通りである。⁽²⁾ が、ここで、『分別と多感』にそれがどう現われているかを例示することは差しひかえる。ただ、全篇に一度(おそろく、オーステインの全作品に一度)しか出てこない形容詞 “sensitive” の例を、あげておかなければなるまい。右に引用した三、十一中の文章の直前にあり、母がメアリアンについていう言葉である——

No—my Marianne has not a heart to be made happy with such a man!—Her conscience, her sensitive conscience, would have felt all that the conscience of her husband ought to have felt.

この形容詞の使用は果してどのような含意を持つてゐるのであろうか。ジョンソンの『字引』の “sensitive” には、簡単に “Having sense or perception, but no reason” ⁽³⁾ といふ。

(7) 『分別と多感』

ジョンソンにとって、「感覚」ないし「分別」と「感受性」の類縁がどうであったにせよ、“sensitivity”はほしつままにこのらせてはならず、「分別」によって制御すべきものであった。たとえば、『ランブラー』(The Rambler, 1750—2)の百十二号に、次のような言葉がある——

In things which are not immediately subject to religious or moral considerations, it is dangerous to be too long or too rigidly in the right. Sensibility may, by an incessant attention to elegance and propriety, be quickened to a tenderness inconsistent with the condition of humanity...

しかし、「感受性」の尊崇がすぐ彼の足もとから起って、「分別」の平衡を崩しかけた。“Novel of Sensibility”と呼ばれる作品が書き始められたのは、十八世紀の半ばであった。たとえば、フランセス・ブルック (Frances Brooke, 1724—89) の『レイディ・ジュリア・マンデヴィル』(Lady Julia Mandeville) としう小説が、一七六三年に出版されたが、書簡体で、こんな筋の物語である——

ヘンリー・マンデヴィルという青年が裕福な縁者ベルモント伯爵 (Earl of Belmont) に養われている。伯爵に

ひとり娘ジュリアがあって、彼らは愛し合うようになる。が、資産のないヘンリーは伯爵家の娘に求婚する自信がない。双方で躊躇している。メルヴィン卿 (Lord Melvin) というジュリアにふさわしい身分の青年が現われ、ヘンリーの誤解がもとで、二人の青年の決闘さわぎが起り、ヘンリーが死ぬ。ジュリアも失意の果てに死ぬ。ところが、伯爵はもともとヘンリーの父と語らって、彼を娘の婚にするつもりであったことが、悲劇のあとで分る。以上の人物のほかに、ウィルモット夫人 (Lady Anne Wilmot) という、機智に富んだ、一見派手な性格ながら、真情に満ちた女性が、登場して、事件の観察をその恋人に書き送ることになっている。

レイディ・ジュリアはしとやかな、純情な少女で、“sensitivity”の権化である。ヘンリーが彼女の容姿を伝える全篇中最初の手紙に、次のようにある——

...her features are regular; her mouth and teeth particularly lovely; her hair light brown; her eyes blue, full of softness, and strongly expressive of the exquisite sensibility of her soul.

ウィルモット夫人も次のように書いている——

I really tremble for my fair friend; young, artless, full of sensibility, exposed hourly to the charms of the prettiest fellow upon earth, with a manner so soft, so tender, so much in her own romantic way.

たしかに、彼女の「多感」さがその破滅の原因になったのである。その限り、ジョンソンふうのモラルは損われていない。しかし、また、その破滅のアイロニカルな感動そのものが物語の主題であることも明かである。

問題は、この場合、「感受性」は「分別」の対立物として人生の葛藤の十分な要因になっていない。ヘンリーが性急な決闘さわぎをひき起すのは、彼の「過敏」さの結果かもしれないが、直接レイディ・ジュリアの「感受性」の責任ではない。書簡体の形式からも推察されるように、この物語はその直前の大小説家リチャードソン(Samuel Richardson, 1689—1761)の作品、ことに、代表作『クラリサ』(Clarissa, 1747—8)の涙もろい甘美な情緒を継承して、それを技法的にいっそう発展させたのである。ところが、同じく結婚問題を扱った悲劇でありながら、主人公は現実に対してクラリサのような性格ないし個性の抵抗を示さない。だいいち、伯爵が彼女とヘンリーの結

婚を望んでいたことがあとで分る、などという説明は、むしろ滑稽であろう。

作者の姿勢とその人間理解の限界を暗示する語が、第二の引用文中にある。「感受性」の尊崇がやがて十九世紀はじめのいわゆるロマン主義復興につながったことは、文学史の明白な実情であるが、ここで、「romantic」という語は「ロマンスじみた」、あるいは、「とほうもない」という意味に使われ、ジョンソンの定義をはみ出した主張を持っていない。この小説の「感受性」と、ひいては、その「ロマンティズム」は、個性の解放、あるいは、個我の確立という積極性を志向していないのである。ブルックの美はむなし(徒花)の美である。

ジェイン・オースティンがフランセス・ブルックを読んだという証拠はない。が、同じく「感受性」をたたえる三篇の物語を書いたマッケンジー(Henry Mackenzie, 1745—1831)はたしかに知っていた。『ノーサンガー・アベイ』のなかに、彼の編集した雑誌『ミラー』(The Mirror)に対する興味深い言及がある。マッケンジーの小説を読んだばかりでなく、『分別と多感』を書きながら、それを念頭においていたと想像しても、大した誤りでは

(9) 『分別と多感』

ないように思われる。

マッケンジーの小説中で最も「ロマンティック」な作品は、最後に出版された『ジュリア・ド・ルビニエ』(Julia de Rouigné, 1777)であろう。これも書簡体で、結婚にからむ悲劇を物語ったものである。

妻を失い、落魄した父に伴って、田舎住いをしてい
るジュリアには、ひそかに思慕をよせた青年サヴィオン
(Savillon)がある。が、父と自分に親切を尽くれる
廉潔なルイ・ド・モントバン (Louis de Montaban) 伯
爵の人柄に打たれないわけにいかない。サヴィオンはジ
ュリアと結婚するにふさわしい資産をえようとして、マ
ルティニックの植民地で働いているのであるが、彼が結
婚したという虚報が伝わる。ジュリアは伯爵の求婚を受
け入れる。サヴィオンが財産を持って帰ってくる。二人
はジュリアの乳母のうちで会って、別れを告げる。伯爵
が妻の貞節を疑って、彼女を毒殺し、誤解を悟って、自
殺する。

舞台はフランスになっているが、物語の構想には『レ
イディ・ジュリア』と著しい類似がある。女主人公ジュ
リアの名がひとしいことも偶然ではないかもしれない。

とにかく、マッケンジーのジュリアも「多感」な女であ
る。亡くなった彼女の母が書き残した手記に、こんなこ
とが書いてある——

I cannot allow myself the idea of her wedding a man
on whom she would not wish to be dependent, or whose
inclinations a temper like hers would desire to controul.
She will be more in danger from that softness, that
sensibility of soul, which will yield perhaps too much
for the happiness of both. (Letter XXIV)

たしかに、彼女の性格は受動的である。悲劇はその性
格と環境の相剋から生じるに相違ないが、破滅の原因は
はつきり外在的である。彼女の父は、レイディ・ジュリ
アの父のように、恋人たちの結婚を望みながら、それを
隠しておくことができる立場にいない。それだけ情況の
設定はもっともらしいとはしても、女主人公はまったく
無力である。彼女の「多感」さはその無力さを拡大して
見せるにすぎないのである。

ジュリアはひそかに思いをよせているサヴィオンが異
郷で結婚したと聞いたとき、まず、その思いを自責する

While I was cherishing romantic hopes: or, at least, while, amidst my distress, I had preserved inviolate the idea of his faith and my own. (Letter XI)

ジュリアの恋は非現実的であり、彼女自身にそう感じとれるものである。そして、それを破綻に導いたのは、同じく「非現実的」(ロマンティック)なモントバンの「名譽感」であった。ジュリアにそう感じられる「名譽感」であった。彼女は父とモントバンの性格の類似を述べ、(こう)述べてゐる——

A high sense of honour is equally the portion of both Montauban, from his long service in the army and his long residence in Spain, carries it to a very romantic height. (Letter III)

『ジュリア・ド・ルビニエ』の「ロマンティシズム」は、『レイディ・ジュリア』のとひとしく、積極性を欠いてゐるのである。(13)

ダッシュウッド一家の「分別」のことを先に一言したが、メリアンの「多感」は母からの遺伝らしく、それは、ジュリアの夫モントバンのような「ロマンティック」な「高い名譽感」と一体になつてゐる。一、一にこんな

ことが書いてある——
... but in her mind there was a sense of honour so keen, a generosity so romantic, that any offence of the kind, by whomsoever given or received, was to her a source of unmoveable disgust.

メリアンがどんなに可憐であろうとも、また、その原因が真率な「sensibility」にあらうとも、それはしよせん矯正されるべきものであった。そして、その矯正の方向は「sense」による節度と調和にあった。オースティンは、少くとも、この場合「マッケンジー以上に」(14)「ロマンティシズム」の積極性を認めてはいないのである。

四

ウィロビーは「才能のある、想像力の鋭い、活気に充ちた、そして率直な親しみ深い態度の青年だった。彼こそまさにメリアンの心を惹きつけるように出来上つた人物であつた。」(15) 彼らはいっしょに本を読み、話をし、歌を歌つた。そして、

... and he read with all the sensibility and spirit which Edward had unfortunately wanted.

(11) 『分別と多感』

が、その“sensitivity”は果してどのようなものか、
といえは——三、八に、彼がメアリアンを棄てたあとで、
彼女が重病にかかったとき、突然、見舞いに来て、エリ
ナーに会う個所がある。自分が財産もないのに、贅沢な
暮しになれていて、金持の娘ソフィア (Sophia Grey) と
結婚するよりほかしかたがなかったこと、自分が誘惑し
て棄てた娘エライザ (Eliza Williams) のことなどを語り、
ロンドンで、棄てるつもりでいたメアリアンから手紙を
受け取ったときの気持ちを、告白する。少し長いが、全文
を引用してみたい——

When the first of her's reached me, (as it immediately
did, for I was in town the whole time,) what I felt is—in
the common phrase, not to be expressed; in a more simple
one—perhaps too simple to raise any emotion—my feelings
were very, very painful—Every line, every word was—
in the hackneyed metaphor which their dear writer, were
she here, would forbid—a dagger to my heart. To know
that Marianne was in town was—in the same language—
a thunderbolt.—Thunderbolts and daggers!—what a re-
proof would she have given me!—her taste, her opinions—
I believe they are better known to me than my own,—and

I am sure they are dearer.

ウィロビー自身が「陳腐な比喻」といい、こんない
かたをメアリアンが聞いたら、とがめるだろう、といっ
ているが、“dagger”や“thunderbolt”というような
「比喻」の語を使わなければ表情を表現できぬとした
ら、彼の感情生活そのものが「陳腐」に相違ない。彼に
このような言葉使いをさせた作者は、明かに意識的であ
り、そうすることによって、彼の「才能」と「想像力」の質
を暗示しようとしたものに相違ない。ウィロビーの性格
はメアリアンの性格のパロディーだといえるであろう。

メアリアンとウィロビーの関係は同質の牽引である。
ともに現実把握の力強さを欠く幻想が自己に溺れた姿と
して設定されている。メアリアンのパロディーであるウ
ィロビーが、メアリアンの趣味や意見を「僕自身の趣味
や意見よりももっとよくわかっている」といいながら、
結果として、彼女の“sensitivity”の真率さに与れないと
したら、彼らの現実的な結合(結婚)は成立するはずがな
いのである。

エドワードはエリナーと同質である。「美男子でもな
く、お互に親しくうちとけて来ないうちは態度もぎげち

なかった。あまり内気すぎで自分の美点を十分に發揮出來ないたちであった。しかし一度生れつぎのはにかみにうちかてば率直な愛情にとんだ心は一つ一つの行いにはつきりあらわれて来た。物わかりもよく、彼の受けた教育がその理解力を十分のばしていた。(一、三)

したがって、メアリアンが彼に詩人クーパーを読ませたとき、その読みかたに「感受性」がこもっていなかった、と彼女がこぼしたとしても——

But it would have broke my heart had I loved him, to hear him read with so little sensibility. (I, III)

それはむしろ彼の抑制のてらいであったであらう。

また、彼が当時流行した風物の“picturesque”な見かたを揶揄する態度も、同じく、エリナーによれば、「一種のてらいに陥った」のである(一、十八)——

I shall call hills steep, which ought to be bold; surfaces strange and uncouth, which ought to be irregular and rugged; and distant objects out of sight, which ought only to be indistinct through the soft medium of a hazy atmosphere...⁽²⁾

自身「分別」を表わすエリナーが彼の「分別」を保証している——

“Of his sense and his goodness,” continued Elinor, “no one can, I think, be in doubt, who has seen him often enough to engage him in unreserved conversation.” (I, IV)

しかし、それにしても、エドワードの「分別」はいかにも消極的である。彼は若気の過ちでルーシー(Lucy Steele)という野卑な少女と婚約しているのであるが、エリナーと知り合つて愛を抱くと、極力それを抑える。

世間体を気にする彼の裕福な母がその婚約を知つて、激怒し、それを破棄して、モートン嬢(Miss Morton)という金持の娘と結婚せよ、といったとき、いまでは気のすすまぬルーシーとの結婚を、便宜上回避することを肯んぜず、母の財産をもらい損う。結局、ブランドン大佐が提供したわずかな牧師祿と、半ば折れた母からの贈り物一万ポンドの資力で、つましくエリナーと結婚する。

エドワードの「分別」は、たしかに、彼とその堅実な半身との結合を成立させるのである。が、それは、どう考えても、みごとに個我の拡充のようには見えない。

元来、エドワードの父は大きな資産を残したが、そのほとんどが母の手中に握られており、母は彼に世間的な

(13) 『分別と多感』

成功を望んでいた。しかし、彼が何になるべきかは一向きまらなかつた。彼自身のいうところによると、彼は牧師になりたかつたが、母をはじめみんなの賛成がえられず、彼らのすすめる陸軍にも、認める法律業にも、気が向かず、海軍を考へつゝいたときには、年をとりすぎていた。で、オックスフォード大学へ入り、それ以来怠け暮して来た(一、十九)。

彼がルーシーとの問題で節操を賣いた結果、かねて希望していたと自称する職業につき、相思の女性と結婚することができた、と告げられても、その「怠けもの」らしい映像の示す現実感の稀薄さは、読者の記憶から拭い去られない。彼の「分別」が充実した生活の実体に支えられていと思われぬからである。

ブランドン大佐は篤実な中年の紳士であるが、どこか一抹の憂愁をたたえている。エリナーの「分別」と同質的ながら、実は、メアリアンの「多感」さに心をひかれるらしい。

エリナーがいう――

My protégé, as you call him, is a sensible man; and sense will always have attractions for me. (I. X.)

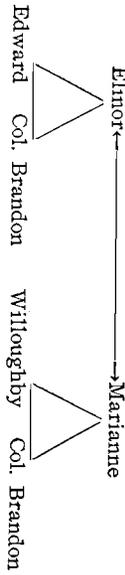
その一ページほど前に、こうある――

Colonel Brandon's partiality for Marianne, which had so early been discovered by his friends, now first became perceptible to Elinor, when it ceased to be noticed by them. Their attention and wit were drawn off to his more fortunate rival: and the raillery which the other had incurred before any partiality arose, was removed when his feelings began really to call for the ridicule so justly annexed to sensibility.

ブランドン大佐は“sense”と“sensibility”とを結びつける人物である。若いころに、兄と結婚した少女との悲恋を味わい、彼女の娘(ウィロビーが弄んだ少女)を保護しているという因縁話(二、九)は、単に物語の興味のためでなく、大佐の手柄を示すからくりのほずである。が、ただ、この逸話が不思議な「因縁話」のように感じられるわけは、大佐の人間描写が――その実質的な「分別」と「多感」の葛藤と調和の映像が、完全でないからであろう。ブランドン大佐は重要な人物でありながら、その人間造形は成功しているといえない。

『分別と多感』の草稿がどの程度でき上ってから、この題名が選ばれたにもせよ、とにかく、現在ある『分別と多感』の物語は、「分別」と「多感」を二つの軸にして回転している。その二つの原理を象徴する人物はいうまでもなくエリナーとメアリアンである。「分別」のエリナーは同質のエドワードと結ばれる前に、同じ性向のブランドン大佐との仲を親類知友に疑われる。いや、むしろ、望まれる。(二、十一、前注) エドワードさえ感違ひする。(三、四) 一方、「多感」なメアリアンはその「多感」の幻影をウィロビーのなかに見出して、むなししい自己偽瞞に陥るが、結局、「多感」さに反応するブランドン大佐の「分別」によって現実へひき戻される。

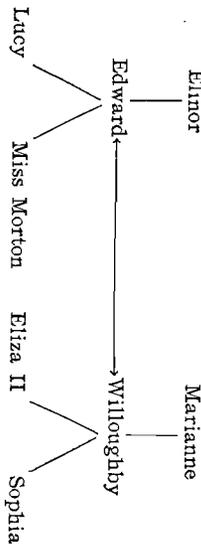
以上を図式で示せば、だいたい次のようになるであろう――



この図式は左右が完全な均整になっている。が、その内容は少しずれている。エリナーはエドワードと結婚す

るが、メアリアンはウィロビーでなく、ブランドン大佐と結婚する。

それぞれ、エリナー(分別)とメアリアン(多感)に対応する人物としてのエドワードとウィロビーを主に考えれば、次のような関係が成立する――



この図式も、左右均整ながら、多少陰影を異にしている。エドワードとルーシーの人間的關係とウィロビーとエライザのそれが、異っていることはいうまでもなく、エドワードの母が彼に、ルーシーとの婚約を破棄して、モートン嬢と結婚すれば、自分も金を出す、というが、彼はそれをきかずに、追放される(三、一)のに対して、ウィロビーが遺産を継承するはずの裕福な老婦人が、彼に、エライザと結婚すれば、過去を許す、というが、彼はそれをきかずに、追放される(三、八)。前者はもちろんモートン嬢とでなく、エリナーと結婚し、後者はメア

(15) 『分別と多感』

リアンとでなく、ソファアと結婚する。

以上の物語をブランドン大佐を中心に考えれば、単純に次のようになる——

Eliza I——Col. Brandon——Marianne

双方とも「感受性」が生み出した人間関係であるが、左は彼の若き日の過敏な想像力に基づくのに対して、右は円熟した中年の現実的理解に馳背しない。

ところ、この正確な、しかも、微妙なヴァリエーションを加えた、細心な計画が、必ずしも登場人物の人間の迫力を生み出していないことは、いままでに述べて来た通りである。その欠陥の原因は技法にでなく、人間理解の標識として作者が取り上げた「分別」と「多感」の解釈の確実さにかんにあった、といってもよからう。

ジェイン・オースティンの小説の特徴は、結婚(現実)問題による若い女の個性、すなわち、人間の個性の充実とそのみごとな映像化にある。小説文学の創始者リチャードソンの作品の主題を継承して、⁽¹⁸⁾それを発展させたことにある、といえるであろう。が、彼女の前半三作の年代的順序がどうであったにもせよ、『分別と多感』はまだ

彼女らしい完全な芸術的效果を生み出していないのである。

十八世紀ふうの人間観に十分新たな展開がとげられていないのである。

(1) ジェインの姉カサンドラのノートに、*First Impressions (Pride and Prejudice)* の原名) が一七九六年十月に書き始められて、翌九七年八月に完成、*Sense and Sensibility* が一七九七年十一月に書き始められ、*Northanger Abbey* が一七九八、九九年ごろ書かれたことが記されている。その寫真版が *The Works of Jane Austen*, VI, ed. by R. W. Chapman に出ている。

(2) R. W. Chapman: *Jane Austen, Facts and Problems*, VI.

(3) ただし、詩人クーパー (William Cowper, 1731—1800) の代表作 *The Task* (1783—4), Bk. VI の *The' grac'd with polish'd manners and fine sense, Yet wanting sensibility...*

とこう行が指摘された。Cf. Chapman: *Austen*, VI.

(4) 初版の区分による。第一巻が二十二章、第二巻が十四章、第三巻が十四章ある。したがって、流布本のように通章にした場合には、第二十三章に当る。

(5) もっとも、"sense" に種々の意味と語法があることは後述の通りである。

(6) ジェインの兄ヘンリーの筆になり、短いものであるが、

- 直接彼女を知っていた人間の記録として、オースティン伝の重要な資料である。
- (7) C. S. Lewis: *Studies in Words*, 6 "Sense", XIV.
- (8) N. E. D., "Sensitive", 2に "Of living beings: Endowed with the faculty of sensation. Formerly often: 'Having sense or perception, but not reason' (J. 1775)" とある。同辞典によれば、"Having quick and acute sensibilities" という意味での最初の用例は、スコットの小説 *Old Mortality* (1816), XXXIX 中のものである。
- (9) E. A. Baker: *The History of the English Novel*, V, VI 参照。ただし *Lady Charlotte Mandeville* と誤記されており、出版年代が記されていない。一七六三年とは *Cambridge Bibliography of English Literature*, II, 546 による年代である。
- (10) 1. Resembling the tales of romance; wild. 2. Improbable, false. 3. Fanciful; full of wild scenery.
- (11) チャップマン編の全集第五巻の "General Index, I: Of Literary Allusions" と第六巻の索引 "IV Authors and Books" にも、同じくチャップマン編の書簡集の索引 "V. Authors, Books, Plays" にも、ブルックの名は出ていない。
- (12) 拙稿『『ノーサンガー・アズレイ』——そのプロテュー』(『オベロン』昭和三十六年八月) 参照。
- (13) しかし、これらの二作ともに「ロマンティック」な風

- 景を語るとき、甘美な情緒を漂わせることを注意しなければなるまい。
- (14) シュリアの夫(父)とメアリアンの母の「名譽感」を述べた個所に、ひとしく "romantic" という語が使われているのは、ただの偶然であらうか。とにかく、この場合の "sense" という語を "sensitivity" と併せ考えると、ことに興味深い。なお、メアリアンがロマン主義前期の詩人クイーバーとロマン詩人スコットを愛読することを述べた個所(一、三〇一、十。一、十七)は、郷土的であり、作者はロマン主義に同情を示していない。また、十八世紀末のいわゆる「恐怖派」作家ラッドクリフ (Ann Radcliffe, 1764—1823) が病的な "sensitivity" を描きながら、"sense" をも志向していた事情と、そのプロテューとしての『ノーサンガー・アズレイ』については、前記拙稿を参照。
- (15) 訳文は伊吹知勢訳『エリナとメアリアン』(河出世界文学全集) による。以下同断。
- (16) N. E. D., "Dagger," 3 と "Thunderbolt," 2 参照。
- (17) "picturesque" の説を唱えたギルピン (William Gilpin, 1724—1804) の *Three Essays: on Picturesque Beauty; on Picturesque Travel; and on Sketching Landscape* (1792) はロマン主義復興の先駆けになった有名な論説であるが、その第一のエッセイは實質的に "roughness" ないし "ruggedness" の論議であり、また、第二のエッセイには "atmosphere" 論がある。エドワードはそ

れに当てつけたのであろう。

(18) Cf. Ian Watt: *The Rise of the Novel*, V. オースティンはリチャードソンに私淑していたが、彼女の人生理解は『クラリッサ』のよきな悲劇でなく、『サー・チャールズ・グランディソン』(*Sir Charles Grandison*, 1754)のよきな喜劇の型に則している。このリチャードソンの失敗作の型に、現実的な新しい内容を盛った点に、小説家オースティンの積極性があるわけであるが、その論証のためには、

稿を新たにしなければならぬ。

なお、オースティンの年少時代の習作、ことに、『恋愛と友情』(*Love and Friendship*, writ. 1790)は、“sensitivity”の若々しいプロテューとして興味深い。ここでは、その論議を省略した。

(一橋大学教授)